

# 津輕弘前藩の武芸(2)

— 資料紹介 —

太 田 尚 充

## 『古往万徳集』(1) 弘前市立弘前図書館蔵

### 解題

『古往万徳集』は、武芸専門書ではなく、いわば弘前第四代藩主・津輕信政の言行録とも云うべき書である。藩主在職五十四年に及ぶ津輕信政の言行あるいは徳行に関する書は多いが、<sup>注(1)</sup>『古往万徳集』もその中の一冊といってよい。『古往万徳集』が武芸専門書でもなく、また、記述の内容には聞き書きが多く、すべて歴史上の事実とするには疑問がないわけではないのに、こゝに「津輕弘前藩の武芸」の資料として取り上げたのは、この書に、武芸に関する興味深い記述が見られるからである。

本稿では、この『古往万徳集』を構成している百四項目の中から、武芸に関する項目を選んで解説し、それに若干の注釈を加えて紹介することにした。

さて、弘前市立弘前図書館（以後市立図書館と略称する）では、次の三冊の『古往万徳集』を所蔵している。

- (1) GK 289 9 『古往万徳集』  
 (2) GK 289 10 『神君古往万徳集』  
 (3) GK 289 11 『古往万徳集』

書の体裁はとにかくとして、右は何れも異なる人物による筆記写本である。この三冊と、他の郷土資料『奥富士物語』等から『古往万徳集』の著者・成立時期・構成等を検討し、解題としたい。

# 一、著者について

右の三冊の中で「奥書」は(1)(3)ではなく、(2)の『神君古往万徳集』に次のように記されている。

## ○資料(1)

明和六<sup>(一七六九)</sup>年正月二十一日書之

藤原通磨<sup>注③</sup>  
花押

右此一冊者□か家に累代持来候

神君御意□□為附録積年願望之處

此般門弟今氏秘庫之一卷密ニ受授之而

幸甚不斜揮老筆謹書之早子々

孫々夢々以而不可出閉戸者也

文政三(一八二〇)  
庚辰

弥生上八鳥

齊藤規房 花押

朱印

この「奥書」のみから推せば『古往万徳集』の著者はいかにも「藤原通暦」で、成立時期は明和六年（一七六九）と考えられ易い。

しかし、『奥富士物語』には、次のような記述がみられる。

## ○資料②

1、御盛徳の大意は、御近士伊藤祐明か家訓御意書、足立氏の玉話集、桜庭正慶か懷誌万徳集等に詳也。注(4)

(巻一)

2、貞享四(一六八七)  
丁卯年十月、那須家御改易、随て屋形様同十四日より翌元禄(一六八八)  
改元

辰年四月十七日迄御閉門被遊。

此儀、

桜庭正慶か万徳集等に詳に記さる故、今爰に省略す。注(5)

(巻四)

3、(御馬役青沼勘右衛門盛次に閑して) 屋形様御買下し被遊たる紫といふ悪馬の仕込、亦、加賀様にて笹船と

言荒馬に乗たる義(など)杯、世々名譽を顕したる人也。桜庭兵助編集万徳集に一二に出たり。注(6)

(巻四)

4、桜庭兵助正慶云、高岡様には、御居合は関口流之御名人にて被為有と承候条物語候。注(7)

(巻五)

1の「桜庭正慶か懐誌万徳集」、2の「桜庭正慶か万徳集」、3の「桜庭兵助編集万徳集」とあるように、『奥富士物語』からは『古往万徳集』の著者は「桜庭兵助正慶」と推定することができる。4の「桜庭兵助正慶云」の箇所は、詳しくは「桜庭兵助正慶（万徳集に）云」と表現されるべきでなかったかと考えられる。

次に、『古往万徳集』そのものに目を転ずれば、その「巻上」の八番目の項目の中に（『古往万徳集』の構成については後述する）左記の一節がある。

### ○資料(3)

その（武芸）諸流、今以て盛なるは、（津軽信政公）御代に専ら成し、御余慶、下々えも志次第御自身御教被遊候由。其の中にも、木村奎之助、樋口衛門、予祖父半兵衛（など）杯（樋）へ御門弟の瑞一也。祖父御相傳の書、今以て難有、子孫に傳わる。

右の文中の「予」という表現は、『古往万徳集』の著者自身か、もし複数の編者によるとすれば、その一人を指すものと考えられる。そしてこの「予」という人物は、資料(2)の『奥富士物語』の記述から推して「桜庭兵助正慶」となるのではあるまいか。また、文中の「祖父半兵衛」というのは、「桜庭半兵衛」と推定することもできるようである。この「桜庭半兵衛」は、次の資料(4)から『津軽一統志』<sup>注(8)</sup>（享保十六年——一七三一—成立）の校正に当たった「桜庭半兵衛藤原正盈」と考えられよう。

### ○資料(4)

桜庭浜之亟は御普代之兵右衛門子にして、御児小姓に被召使、御近習小姓、后、半兵衛正盈と申、御馬廻組頭迄相勤、世に名を被賞人品也。津輕一統志撰者也。当時、兵助正慶大組武頭世祖父也。右一統志全部十四卷、享保十二七三一六亥年五月撰。注(9)

(奥富士物語 卷二)

右の(3)(4)にあるような資料からも、『古往万徳集』の著者は「桜庭半兵衛」の孫「桜庭兵助正慶」と推定することができる。

それでは翻って、先の資料(1)「明和六己年正月二十一日書之。藤原通暦」の「書之」というのは、どのような意味であったのか、これは「藤原通暦」が『古往万徳集』の著者として「書之」ということを意味していなかったのか。この点に少し触れてみることにする。

もともと「藤原通暦」は、『奥富士物語』の編者であって、「今家」の七代「今兵部左衛門通暦」といわれている。通称「今通暦」である。

なるほど、資料(1)にあるように「齊藤規房」が「老筆を揮って謹書」したという原本は、右の「今氏秘庫の一卷」であった。そして、確かに「今氏秘庫の一卷」であった『古往万徳集』は、明和六年(一七六九)、今兵部左衛門「藤原通暦」の書いたものに違いなかったと思われる。

このようにみてくると、先に述べたように『古往万徳集』の原著者が、いかにも「藤原通暦」のように思われるが、もし「藤原通暦」が原著者だとすると、資料(2)の『奥富士物語』で「此儀、桜庭正慶か万徳集等に記さる故、今爰に省略す」などという表現はあり得ない。資料(2)の各記述は、むしろ「藤原通暦」自身が『古往万徳集』の著者は「桜庭兵助正慶」であると紹介している箇所と考えられる。



写(2) 兵助正慶の父・桜庭兵右衛門藤原武正の墓（弘前市長雲山藤先寺）儀光院法案道性居士・行年四十七歳終焉寛延二己巳年七月六日（1749）



写(1) 『古往万徳集』の著者、桜庭兵助藤原正慶の墓（弘前市長雲山藤先寺）智鏡院靈鑑寂明居士・明和八辛卯年正月三日（1771）

以上の経緯から、やはり『古往万徳集』の著者は「桜庭兵助正慶」<sup>写(1)</sup>と推定しては、間違いないと考えられる。複数による編集とすれば、その代表であろう。「藤原通暦」が「明和六己丑年正月二十一日書之」としたのは、原本を書き写した期日を意味すると思われる。

さて「桜庭兵助正慶」なる人物についてであるが、資料(4)に「大組武頭世祿四百石」とあるだけで、人物像については資料不足でつかみ難い。大組武頭・四百石というのは、『弘前市史・藩政編』（二二三頁）から、手廻組頭と思われるが、戦斗陣形を作った時に、藩主の近くで戦斗員を指揮する武官である。藩主の信頼が深く、それなりの器量のあった人物と思われるが、いまひとつ具体性に欠ける。たゞ家系上から推察すれば、津軽信政の言行について資料あるいは聞き伝えから充分書ける立場にあったと思われる。それは、祖

『古往万徳集』の成立の時期は、結論を先に述べれば不詳と云わざるを得ない。たゞ資料(2)のような「万徳集」の引用や、次の資料(5)の引用などから『奥富士物語』（明和二年—一七六五—成立）以前には成立していたと考えられる。

## 二、成立の期日について

に、藩主近くに仕える立場にあったことからの推察である。ことに半兵衛正盈は、『津軽名臣傳』<sup>注10</sup>にあるように、四代信政・五代信寿・六代信著の藩主三代にわたってに仕え、「見聞乎事物一而記憶不忘也」という博識の人物でもあったから、兵助正慶が『古往万徳集』を書くに当たっての資料に不足はなかったものと思われる。



写(3) 兵助正慶の祖父・桜庭半兵衛藤原正盈の墓（弘前市長雲山藤先寺）忠操院殿節山良儀居士・行年六十七歳終焉、元文五庚申歳五月廿一日（1740）

父桜庭半兵衛正盈が、資料(4)や注(9)に示したように、津軽信政の御兄小姓として幼年時代から「御側」に仕え、「御直弟」として直接「神儒道」の指導を受け、長じては御馬廻組頭として側近にあったこと、また、父桜庭兵右衛門武正も『奥富士物語・巻三』<sup>写(2)</sup>（『新編青森県叢書（五）』四一二頁）に、「桜庭半兵衛正盈嫡子兵右衛門儀は無足にて、玄桂院様<sup>写(3)</sup>（五代藩主信寿）御小姓組相勤」とあるよう

## ○資料(5)

1、(津軽信政の兵学講談に関して)

御意書ならびに万徳集、玉話集にも審成間略<sup>注40</sup>之。

(巻一)

2、(当田流当田半兵衛正吉に関して)

万徳集に元禄七年十一月十五日七拾才余にして病死、其の廟跡最勝院に有之由傳<sup>注41</sup>。

(巻四)

3、(浅利伊兵衛均禄に関して)

此の人、業用及び一身の始末、万徳集に巨細<sup>注42</sup>なり。

(巻四)

右のように『奥富士物語』の編者「藤原通暦」は、すでに成立していた『古往万徳集』をいろいろと参考とし、また、ほぼ同じような文章を数ヶ所に引用している。従って『古往万徳集』は、明和二年(一七六五)以前に成立していたと推定することができる。

また本文中に、『津軽歴代記類』『信政公』の記述に引用している『渡辺利容筆記』の文章が、部分的ではあるが、そのまま『古往万徳集』に引用している箇所が見られる。この『渡辺利容筆記』が、注(1)に示したように享保十八年(一七三三)以後の記述であるから、『古往万徳集』は、享保十八年から明和二年の間の成立ではないかと考えられる。

### 三、構成について

市立図書館が所蔵している三冊の中、GK-289-9『古往万徳集』とGK-289-10『神君古往万徳集』は、上・中・下巻に分け、さらに項目別に記述している。GK-289-11『古往万徳集』にはこの項目がなく、一連の記述で、しかも前半の一部が欠落している。上・中・下巻に分けているといっても、何を基準として分けているのか判然としないし、項目に



ついても、それぞれ題名があるわけではない。

また、項目の数はGK289-9『古往万徳集』に多く、「今家秘庫の一冊」というGK289-10『神君古往万徳集』に少ない。次に項目に番号をつけ、書き出しの文を示して列挙する。○印のあるのは、GK289-10『神君古往万徳集』に欠けている項目である。

# ○資料(6)

## 上巻 (GK289-9『古往万徳集』では巻上)

- 1、一、信政公聡明叡知の御良将……
- 2、一、御幼年様を御老年迄……
- 3、一、毎朝早旦を……
- 4、一、孔子在川上曰……
- 5、一、常々御意に、我若年にして家督……
- 6、一、御入部の時を其頃世上に……
- 7、一、御若年を御学問に御志深く……
- 8、一、弓矢は第一神学御相傳にて……
- 9、一、信政公於劍術他流との仕合……
- 10、一、浅利均祿一向兵法に心然を尽し……
- 11、一、信政公居合は関口流……

- 12、一、一年江戸酒井雅楽頭様御舍弟……
- 13、一、或時御意に、汝等能聞覚よ……
- 14、一、或時御意に、大名は為差勤もなく……
- 15、一、御近習廻り誰に不寄……
- 16、一、或時御意に、汝等本望至極なることを……
- 17、一、或時御意に、餅ハ餅屋の餅こそよけれ……
- 18、一、或時御意に、異国にて新宅<sup>江</sup>移徙せしに……
- 19、一、松山玄山其外御伽の衆御前に罷有候節……
- 20、一、或時御近習の面々<sup>江</sup>御咄被遊候は……
- 21、一、或時御意に、汝等能聞、唯武士は武の意肝要也……
- 22、一、亦御意に、渡部大隅守配流被仰付……
- 23、一、或時江戸に於て御看盤へ日々の……
- 24、一、一年御者頭福士氏無調法至極なる義有之……
- 25、一、亦一年御者頭相勤候牧只右衛門不届の義有之……
- 26、一、信政公神田の御座敷に被成御座候頃……
- 27、一、信政公御小姓に北村源八と云物有……
- 28、一、信政公御上下の節御道中腰越と申所にて……
- 29、一、月々廿七日桂林院<sup>御嫡子様</sup>公御命日故……

- 30、一、信政公御在国の時、御近習衆の内御献立を相伺候時……
- 31、一、亦或時御意に、人の人たる道を穿鑿する時ハ……
- 32、一、御在國中、定りて朝御膳ハ山吹の間にて……
- 33、一、或時信政公、森備前守様<sup>江</sup>額<sup>江</sup>の文字を御数被遊……
- 34、一、或時御餅菓子被召上候時……
- 35、一、或時御城の石垣少々孕申たる所有之……
- 36、一、或時御意に、異国にても斉の桓公ハ勝れたる人品なり……
- 37、一、御国の奥御座の間に常に御立被為置候御衝立……
- 38、一、御家中諸士病氣にて御目付方<sup>江</sup>断状差出候節……
- 39、一、或時御意に、汝ら能聞、後の面々共も頭奉行をも勤べし……
- 40、一、凡而信政公御家来を被召仕ニハ……
- 41、一、亦是御近習衆何そ筋能事を申上……
- 42、一、信政公御能ノ節の被仰付人数其外……
- 43、一、信政公御在世毎月御家中の御礼被為請候節ハ……
- 44、一、信政公御在世御家老職被仰付、誓詞相済初而被遊御逢候節……
- 45、一、江戸表にて御料理人坂本西左衛門と申者……
- 46、一、或時御意に、数寄道ハ能武士も好……
- 47、一、或時御武芸所にて御家門方<sup>江</sup>劔術御見せ被成候由にて……

48、一、信義公御所望、信政公十歳の歳旦詠せらるゝ和歌……

49、一、寛文元<sub>丑</sub>年猛夏、信政公御入部……

50、一、御入部の後の有時……

51、一、又自問自答の御心にて……

中巻（巻之中）

1、一、信政公御在国中にハ、御領内津々浦々御巡見……

2、一、或年、青森御逗留の内、海辺御歩行……

（この項GK 289—10では「蒔苗村の百姓太郎次、親に孝なるを被遊御聞」の書き出しになっているが、この内容も含められている。）

○3、一、亦或年、御巡見の節新田の内……

○4、一、或時、御雑談に御側の面々江御咄、国詞に尤なる事有……

5、一、御国中、古来ハ豊饒なれハ盗人もなく……

6、一、世押移り江戸表にてハ専ら新吉原等……

○7、一、元禄八<sub>乙亥</sub>年、六七十年以来無之大凶作……

○8、一、或時、御城下に盗人有之……

○9、一、於江戸表御機嫌御窺い等の義に付……

○10、一、信政公御酒の義は、たとへ小盃といへとも其の半に被為受候……

- 11、一、信重公御婚礼の後御中屋敷にて……
- 12、一、渡辺嘉兵衛と申す仁、外記流の鉄炮の名人にて被召抱……
- 13、一、元禄十五年極月十四日の夜……
- 14、一、或時、江戸御発駕前日御座の間廻り……
- 15、一、常々御意には、武芸は何れもと申す内、先々馬を達者に乗習うべし。
- 16、一、一年、鯨ヶ沢江御下浜の節……
- 17、一、御馬上にて御名譽多き中に……
- 18、一、或時、江戸表にて浅草の辺江御出の節……
- 19、一、御道中ハ大方御馬にて御籠に不被為召……
- 20、一、御馬の義ハ、右にも言記し候ことく……
- 21、一、御側外様の面々、親並びに子ともに至る迄……
- 22、一、或時御咄に、身ともハ大名の事なれは……
- 23、一、寛文年中の由、御登被遊候節……
- 24、一、一年、江戸表にて誰人の執持にや……
- 25、一、青沼勘右衛門御馬役、殊の外名人にて……
- 26、一、或年、江戸表にて松平加賀守様御馬、其の名を笹船と申す由……
- 27、一、亦何れの頃か、勘右衛門御供にて罷登り候節……
- 28、一、或時御意に、士となり武芸を勤るは家業にて……

## 下巻（下之巻）

- 1、一、頃ハ元禄年中の御事にて、おほやけの御評義今天下に御大事有んにも……
- 2、一、大和にあらぬ唐土にとも古聖の徳ハ枯骨に及ふ……
- 3、一、有る時の御意に、新古に不仍心に叶得とも、氣に応じ難き有……
- 4、一、古き衆ハ実過て花なし、中奥は花過て実すくなし……
- 5、一、亦、御若年に被成御座候頃、兵学御執行の節……
- 6、一、御靈社御代、北村与左衛門と申す者聯か無調法有之……
- 7、一、或時の御意に、不依何事に人に物を被頼と云事ハ重き事也……
- 8、一、御仕置、段々御改被遊候……
- 9、一、大坂陣の時、真先に井伊掃部殿被近時、御馬の口取、懷中よりきせる取出し……
- 10、一、御嘶に、坂倉周防守殿は公事御聞被成候……
- 11、一、周防守殿公方の御前<sup>ニ</sup>被召、其方在京の内……
- 12、一、亦、井上主計殿松平伊豆守殿共に御老中也……
- 13、一、御英才の御餘光、普請作事方の事迄御明細に被成御座候由……
- 14、一、或時の御意に、我ら常々作事数寄にて……
- 15、一、天下の人口といふ事を知るかよし……
- 16、一、常にも度々申し聞かす候通り、人間の天地に有て万の物の頭となり……
- 17、一、古<sup>レ</sup>親死して三日の間は食も口に不入、粥ばかりくらひ……

18、一、親の事を思ふとハ如何するぞとなれば……

19、一、親の死に玉ふ日ハ五旬の間は、一入に慎み悲しむ事聞く……

20、一、一戸氏覚書の写、宝永六年三月十一日、西の御郭御馬場江……

21、一、信政公御代、初中頃迄御国中の富榮、語り傳ふるに限り無ク……

22、一、亦、元禄年中の頃迄も浪岡八幡宮にて例年八月十五日此宮へ……

(補遺)

1、一、御城の北丑寅に当て山王権現宮有……

2、一、貞享四丁卯年三月十八日、弘前表被遊御発駕……

○ 3、一、貞享四年神田鷹匠町御上屋敷に被遊御座候節の義……

以上の項目の数をまとめれば、左記の通りである。

GK 289-9 『古往万徳集』		GK 289-10 『神君古往万徳集』	
卷上	51	上卷	29
卷之中	28	中卷	18
下之卷	22	下卷	21
(補遺)	3	(補遺)	2
計	104	計	70

## 注

(1)

○『弘前図書館郷土資料目録・第二巻、岩見文庫郷土資料・目録その一』（弘前市立弘前図書館、昭三六・三）一九二〇頁に、渡辺利容『高照宮御遺鑑』伊東裕明『高照靈社御意書』（享保二年―一七二七）内容が同じ書として「明君夜話近士口伝集」「信政公御意之筋聞伝集（尊聴録）明訓録」「高照靈社玉話記」を、その外に「貞享規範録」等を挙げている。

○『弘前市史・藩政編』（弘前市史編纂委員会・名著出版・昭四八・一一）「付録・Ⅱ部門別史料」一〇―一一頁に、森内繁富「貞享規範録」（文化三年―一八〇六―）、渡辺利容「高照宮御遺録」享保一八年（一七三三）を挙げ、伊藤裕明「高照靈社御意書」（享和二年）「明君庭話近士口伝集」「信政公御意之筋聞伝集」（尊徳録・高岡公明訓録）「高照靈社玉話記」などは「高照宮御遺録」の抄録と思われる、としている。また、同「付録・Ⅰ一般的史料」四頁に、藤原通磨（今善之丞）「奥富士物語」（明和二年―一七六五）を「四代信政の事蹟を内容としている」と挙げている。

(2)

○『新編青森県叢書（五）』（一八五頁）に所収されている『奥富士物語』の「解題」でも、ほど同様の書を挙げている。

『奥富士物語』七巻について。

先に『青森県叢書（第八編・第九編）』（青森県立図書館・青森県叢書刊行会編、昭二九・四、青森県学校図書館協議会刊）に収録され、後に『新編青森県叢書（五）（六）』（新編青森県叢書刊行委員会編、昭四八・一〇、歴史図書社刊）にも収録されたが、その「解題」に、「『奥富士物語』は明和二年、藤原通磨によって編輯、補記されたものである。本書は津軽中興の祖であり、後に高照神社に祭られた津軽藩四代信政公の事蹟を詳記したものである。津軽信政公は当時、白河楽翁公、上杉鷹山公、細川銀台公と併せ、天下の四名君と称せられた人で、治世五十四年間に、新田の開墾、藩内産業の促進による津軽藩百般の基礎をきづき、尚、文武諸芸の堪能者をお召抱になり、北奥の果にある陸奥国の文化興隆に尽力せられた藩主である。（中略）編者通磨は、妙公、妙心院様、御霊社様、神君、高岡様等と沢山の敬称を以て尊奉した信政公の御事蹟が烟滅されるのを歎んじたあまり、明和年中旧本に補記、本書を書き誌したものである。（後略）」としている。

多方面にわたって採録した『奥富士物語』は、後に『津軽歴史記類』の「信政」の項（巻二）や『津軽藩旧日記類』に引用されているところから、影響力の大きい書であったと考えられる。なお両書については『弘前市史・藩政編』『附録』の「史料解説」七―八頁に詳しい。

(3) 『新編青森県叢書（五）』（既出）の『奥富士物語』の（解題）によれば、藤原通磨は、今善之丞通磨、今家の七代、今兵部右衛門通磨のことであるとしている。『奥奥土物語』の編者である。

(4) 『新編青森県叢書（五）』一九五頁。

(5) 『新編青森県叢書（六）』二二頁。

(6) 『新編青森県叢書（五）』四九五頁。



- (7) 『新編青森県叢書(六)』一一四頁。  
 (8) 『津軽一統志』。第五代藩主・津軽信寿時代の享保一六年(一七三二)五月成立の官撰の史書。官撰の史書としては、弘前藩唯一といわれる。校正は留守居組頭桜庭半兵衛正盈、編集は御中小姓相坂兵右衛門則武、同伊藤八右衛門祐則の二人である。(『弘前市史』『附録』『史料解説』三頁より)  
 (9) 『新編青森県叢書(一)』に「津軽一統誌」として収録されている。この「首巻」に「桜庭半兵衛藤原正盈」校正とある。『新編青森県叢書(五)』二九八頁。また、同書の四五三―四五四頁『奥富士物語・巻三』に、桜庭半兵衛正盈を次のように紹介している。  
 一、対馬源司愛将云或老人の物語に、享保頃御留守居組頭たる由、桜庭半兵衛正盈といふ人有、此人桜庭太郎左衛門子にして、浜之丞と申妙心院様(津軽信政)御兄小姓たちにして、万事御直弟にて神儒道等も不聞、正儀篤行の人普く人の知所也。殊に幼年より御側に伺ひの事故、御家法等も厚く覚正たる人也。(以下略)  
 『津軽名臣伝』(宝暦年間―一七六〇年頃―乳井貢建清)「津軽史第十三巻」所収、三八九―三九〇頁にも紹介されているが、これには「桜庭半兵衛正盈・始別浦太郎左衛門」とある。  
 (10) 『津軽名臣伝』。注(9)参照  
 弱冠而處從於信政公至信著公、勤仕凡三代容貌有威嚴言行最正矣且審礼法也、故世以此人之言信而不疑問法於此人以爲証又見聞乎事物一而記憶不忘也。(以下略)  
 (11) 『新編青森県叢書(五)』二八三頁。  
 (12) 『新編青森県叢書(六)』二四頁。  
 (13) 『新編青森県叢書(六)』二四頁。  
 (14) 津軽信政の子、第五代藩主・津軽信寿の初名

## 『古往万徳集』(1)

三冊の中、GK―289―9『古往万徳集』は分量としては一番多いが、脱字・誤字もあり、原本と同じであるとは必らずし

も特定できない。しかし解説に当ってこの GK 289 9 『古往万徳集』を中心とし、右のことを考慮しながら、とくに GK 289 10 『神君古往万徳集』との比較検討を密にして進めることにした。

# 凡例

- 一、原文にはないが、句点（。）読点（、）をつけ、段落を作った。
- 一、漢字はできるだけ当用漢字を用いたが、原文を生かしてそのまゝの漢字もある。
- 一、変体仮名・異字は、一部を除いて仮名または漢字に改めた。
- 一、原文の文体を損なわないように、送り仮名・接尾語を付したが、一般的に読めると思われる箇所はそのまゝにした。
- 一、各項目の文頭にある洋数字は、GK 289 9 『古往万徳集』の項目の順番を示している。
- 一、GK 289 9 『古往万徳集』には、古文書としては珍しく、現代の頁数とも云うべき数字が、枚数毎に記されている。これを漢数字で示した。たゞし、「十二」が重複している。これはそのまゝにしておいた。
- 一、文中の□□は虫喰い、その他による判読不能の文字、（ ）内は解説者の注である。

## 上巻

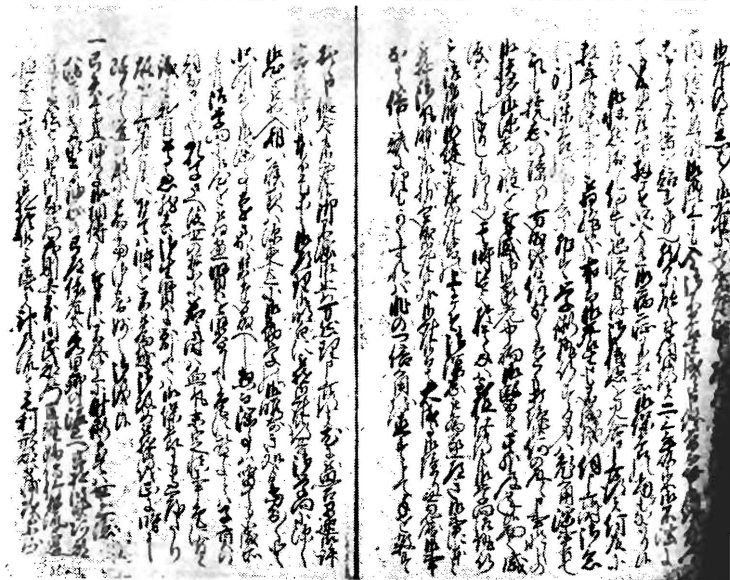
一、弓矢は第一神字御相傳にて奉申ニ不及候上に、射術に至てハ、世に無隠八幡太郎義家公ヲ神秘の弓道俵藤太秀里卿の流れ、一の宮随波斎、阿部道半良信ヲ星野勘左衛門茂則夫ヲ本間民部左衛門匡隆嫡傳竹林流弓道極意迄、不残御極め被遊。

於御馬藝ハ、神道流ハ毛利刑部少輔様ヲ不残御傳受御済み被遊候由。

神陰流と申すハ、土屋忠兵衛様ヲ御印可まで御取り被遊候由。

其の後、江戸浪人長崎義左衛門と申す仁被召寄御尋ね被成候處、元来諸流御極め御望みに御事の由に被遊御座候

「一、弓矢は第一、神学御相伝にて奉申ニ不及候上に……」書き出しの部分。



「一、弓矢は第一、神学御相伝にて奉申に不及候上に……」書き出しの部分。

へば、間もなきに皆済の御傳受数折を被為極、御晩年には御工夫の御流義を被為立。

御家中にてハ、御当流注10と申す御流義の名も御座候得ども、御秘事の義なれハ爰に略す。その諸流、今以て盛なるハ、御代に専ら成りし御余慶、下々注11も志次第、御自身御教被遊候由。其の中にも、木村奎之助、樋口衛門、予祖父半兵衛注12ハ御門弟の瑞一也。祖父御相傳の書、今以て難有、子孫に傳わる。

偕注13、御劔術は、梶新左衛門注14様御流義の一刀流御究め被遊。其の後、天下の兵法所と申し候小野次郎右衛門注15様の御流義、是れ又御極め被遊。此の小野様の御門弟凡そ三千人余の内にも、被為勝候注16三人の内の御一人にて被成御座候由。

或ハ鎧・長刀・棒・取手、又は鎌・居合等の端藝に至る迄、其の極に不被為至と申す事不被成御座候由。

数寄注17の結構、茶の湯の事業注18杯も被成御勝れ、片桐様、小堀遠州様杯注19の御流義にて天下の人に御知られ被遊候由。

御筆道ハ、尤も御能書、誰不知人なし。初め道三よふ被遊、其の後、稻葉備前守様御進めにて加茂の甲斐被遊、

不絶御修練被遊候由。稻葉様は甲斐方注20被成御究め、後の甲斐注21返り傳受まで被成候御人の由。後の甲斐も此方

様注22被召寄、御深切に御尋ね被遊候由。

此の御筆道ハ事起り、楽箸の調子、管絃注23の式、公方の楽人を被召寄、時々御近習の面々習ひ学び候様に被仰付。

稽古日定め有之。其の節、其の稽古所に必らず御出で被遊。御自分ハ不被成候得ども、与得御聴聞被遊候由。注24

人の一方を究るさへ、人毎に不成事にて候か、右の通り御智福御好業御圓滿ならへなりて、可申上も承り傳へず。尤も、孔子は聖人に座して且つ多能にあらせられ候時、君子ハ多能不成と門弟中被申候節、孔子の御答、吾少ナル也、賤シ故多ク能ス。鄙事君子多ナラン乎哉。不多ナラ也と。

信政公は、御生まれながらの御大名にて、如斯は、孔子の御徳にも争注25而御恥可被遊御給。直の感應にて、諸藝の

名人上手自然に御国<sup>江</sup>来り集る。上方廣しといえとも稀なる程の輩は、諸職人に至る迄<sup>(あげてはかりがたき)</sup>難斗<sup>争</sup>も、御一人の御徳に帰す。

情、愚案<sup>(つらつ)</sup>するに、御領郡ハ、陰氣強くして雪深く積り、寒冷又難堪忍。極陰には一陽起り、物の始ハ必らず氣粹なれば、御当地生れは、人心には至極とする處の義勇に堅く、日本国中にて東とて、其の方にも東方にして太陽の出る始に近く、土地上方ハ狭しといへとも、是の形陰にして内に陽を含む。発する時は三国一の富士山に似たる岩木の高山高有り、能き武士可出事也。然れハ和国三国一の大日本国、其の内にて此の御領は極めて一なるべし。其の鎧、馬、鷹の類迄逸物也。人の性根も等しなるべし。

信政公の御生得、前代未聞の明君、余国猶不例聞、且つ終日乾々<sup>(けんけん)</sup>たる御行状、下聞を能く被為入、下有下急<sup>(火)</sup>の申しなす所迄に、常<sup>十三</sup>に心を被為尽。善惡是非邪正、御明細万事に埋もる事なきに、

爰に当田流劔術有。神代<sup>江</sup>の古流にて、元祖の師を世上知る人稀也。

当田清元、知行一万三千石<sup>并</sup>弟子取扱ひの為御扶持三百人扶持は、此の流義に附たる古来<sup>江</sup>の縁知の由。

此の人は中古の開起たり。此の嫡傳を阿部豊後守様御側御用人、知行千三百石松田仁兵衛と申す仁、其の子にて松田甚五兵衛、此の流の嫡傳を得、当田を名字とす。其の後当田半兵衛と相改む。其の頃、天下の逆心油井正雪

に念頃<sup>(息)</sup>に出会いせし事無隱。傳奏<sup>江</sup>被召出御尋ねの時、数年懇に語合い候段無相違候、併し、正雪逆心<sup>注四</sup>の事<sup>(つゆ)</sup>露不知と申し分相立つ。夫れ<sup>江</sup>奥州<sup>江</sup>下り、暫し仙台に有り。夫より御縁にや、御家<sup>江</sup>被召出。

今、末世に残る表五ツの切組<sup>(通)</sup>、裏中極外扱ひと申す其の機其の業の勝れたる事、一度高覧の上に、御覧残り可被遊様なし。御援用瑞一の御流義にも不被遊、御自身の御信厚なき如く成り行きし事は、世俗の不審する處也。必竟ハ、天命の時不至処にさとし極る事なれとも、此の答にて難済も有、俗の不審ハ俗の答にて申すに、其の時の師

役、不幸にして生得不才、取なし不調法故にて候由。

抑も当田流と申すハ、我等式不承果事に候へとも、大綱臥役の雑談ニは、此の流義、かけまくも賢き天照大神の

神代に起り、日本に流布して末代の今に至る。是れ誠に有驗なり。流義元祖の神号ハ、今時許取(ゆるしとり)の面々へも容

易に不語事といへハ、夫れは爰に不記而密す。同し御代、鹿嶋太明神建て被置し御流義、則ち鹿嶋流注四と申して今鹿

嶋の郡、葛西藤左衛門と名乗る。其の頃七十余才の老人なれとも、流義師範をして門弟郡内に満ると申す。

諸(まじ)、右当田流師清元、本国越前の人、一伯様御家中也。元祖より廿五代の嫡傳と也。然るに、当田流の極意と鹿

嶋流の極意と、一ツにして二ツ非ず。爰を以て、神流ハ別れても其の本一ツなる事不可疑。其の子細、末に断之。

御当地五、参り候当田半兵衛、清元ハ五代の嫡傳、然るに同人、名譽を振舞うといへとも、無筆文旨にして生質簡潔短慮也。御家中にも門弟多数、流義繁昌。

諸流の太刀高覧の節、半兵衛門弟仕合被仰付候節、当田流には同門同士の仕合無御座候段申切る。諸(まじ)、他流と

ハ被仰付次第、弟子ニ不限拙者初ニ可仕候。当流には死合と、文字にも書かせ、同流にての義ハ全く不罷成義と申

上げ候へば、尤にハ不被思召、何とも事荒き申し様になり候故、御合点可被遊様なし。御前には御合点被遊候て

も、万人に不通事ハ、大人の御用の無き筈なれば、申通りにて仕合無之流義ならバ無用候と有之。其の後、流義も

半兵衛不首尾に連れ、御流義にも不被成。其の後も諸流一統に高覧被遊候得とも、仕合の義ハ不被仰付候由。

夫れより数年過ぎ、元禄七甲戌年十一月五日、七十余歳にて病死す。最勝院 朝所有之由

嫡子長之助、家督無相違被下置候得とも、折々氣乱れ、後ハ子を二人共に差殺し、其の身致自殺、跡絶え果て候

由。半兵衛若年より度々辻切りに罷出候て、人多く切殺し候由。十五(男)直物語にても申候由にて候得バ、其の報感にて子孫如此ならんか。

緒、半兵衛嫡傳の門人、浅利伊兵衛均禄、御家中門第三百余人余の弟子、其の内許の弟子唯二人ならでなし。其の上、最上唯受一人浅利伊兵衛均禄傳受。均禄其の節ハ知行二百石、寄合役相勤む。親は浅利五郎左衛門と申候由。

尤も此の流他流と違ひ、唯受一人ハ外は印可不傳來候先師の掟の由。尤も其の器に相當る弟子無きに至てハ、縦令極意秘絶え果て候とも伝へ不申事、他流に格別なる事、皆太古の神流たるの由。

均禄ハ極意皆済、一戸三之助宗明物語にて候。惜哉、此の神流宗明迄にて、終に宝曆二壬申年十月十九日、宗明、津

輕弘前茂森町にて七十三才にて身まかり、今ハ此の流義の印可ハ無之と云云。

さて、当田流に三品有。山崎戸田は今越前に有、山崎勘斎の跡、山崎次郎左衛門知行三千石の由。兼牧富田は始祖兼牧越後と申す人、其の子孫も今に兼牧越後と申て、知行ハ一万三千石、何れも加賀宰相様御家中にて太刀師役の由。

# 注

(1) 「津輕信政が吉川神道の奥秘伝援をうけ、神道を藩政にとり入れたことは有名である。信政は、一五才で山鹿素行の教えを受け、さらに二六才の時吉川神道を学んだが、これは一時的のもので、素行が没するまで儒学に専心し、儒学に基づいて藩政を行った。四〇才を過ぎて吉川神道に学び、吉川惟足（初代、従時）から一事重位の許証を得、さらに従時の死後、二代惟足（従長）について徹底的に学び、元禄八年（一六九五）五〇才で高照靈社と神号を受け、同一三年に二事重位、一七年に三事重位、続いて、四事神離盤境唯受一人の道統を受けている。」『弘前市史・藩政編』（既出）六四三～六四四頁。

(2) 俵藤太秀里卿。藤原秀卿のこと。生没年不詳。平安前期の鎮守府將軍。従四位下。魚名の子孫。下野大塚村雄の子。俵藤太は俗称。平将門の乱に平貞盛と協力して将門を倒し、その功により下野守となる。東国武士の巨理・小山・結城・下河辺氏などの祖。『角川日本史辞典』（昭四四・一一版）参照。

(3) 一の宮随波斎。竹林流弓道の祖・石堂如成（名は林左衛門、号が竹林坊、慶長の頃尾州藩士）の弟子。尾州清須藩士。

『日本武道全集・第五卷』（今村嘉雄編、人物往来社、昭四一、七）二二六頁。

(4) 不詳。おそらく、竹林流系の人物と思われる。

(5) 星野勘左衛門茂則。尾州藩士。号浄林、寛文二年（一六六二）五日に京都三十三回堂通矢六六六本を射て、天下一と称さ

れ、尾州系竹林派の名を高からしめた。元禄九年（一六九六）五月六日、五五歳で没した。『図説日本武道辞典』（笹間良彦著、柏書房、昭五七・一一）六二九頁、『日本武道全集・第五卷』（既出）二二七頁。

- (6) 本間民部左衛門匡隆。「元禄十五年弓道石堂竹林流射手、於江戸表被召抱。二月二日御礼知行五百石被下置。御側役か。尤御家中之師範被仰付。江戸・御国共に門弟余多有之由」「抑本間民部左衛門は、其先紀州家の人にて、本苗木村典膳と云しと也。然るに何か子細有て彼家出奔し駄にも成候哉。御当家に出て後、弥名<sup>いよ</sup>広まり、名人とも可謂射手云々」『奥富士物語・巻七』『新編青森県叢書（六）』所収二七一頁。『津軽藩旧記伝類』三九二頁。

- (7) 馬術における神道流という流名は不詳、神当流ではないかと思われる。たゞし『武芸流派事典』（綿谷雪編、新人物往来社、昭四四・二四九頁）では「日本騎道史」を引用し、「津軽四代藩主越中守信政。正保二年生れ。養生軒また清和堂と号す。宝永七年死去。六五歳。心陰流を土屋市兵衛に神統流を毛利民部少輔に学ぶ。当時津軽藩におこなわれた長崎流、神当流、近援流を折衷して一統を創め、御当流といった」としている。毛利刑部少輔については不詳。

- (8) 土屋忠兵衛。神陰流は劔の流名のものであるが、こゝでは右の注(7)と同じように馬術の流名である。『武芸流派事典』（既出一二四八頁）では次のように紹介している。「骨平流」次倉流の次倉百助の門人、土屋忠兵衛から悪馬骨平流と改称した。忠兵衛は名を和貞といひ、江戸旗本であった。悪馬神当流二代の渡辺勝兵衛良直に学ぶ。伝系は福井藩に残った。

- (9) 長崎義左衛門。長崎義左衛門政友（長崎流馬術の祖）の子、長崎主膳のこと。『奥富士物語・巻三』には次のように紹介されている。

「武江に居住浪人なるべし、長崎儀左衛門と云人有、近授流馬術の達人と云。本より御家江御出入猶又御師匠筋の人のなるべし。厚御扱の由。然に元禄十五年午丁二月十五日、儀左衛門主膳召出候而翌年正月十一日に新知行三百石被下置、御近習小姓並に被仰付御召仕候。且其後之儀は如何様に被召仕候や不承候」

- (10) こゝでは馬術のことで、長崎流、神当（道）流、近授流等諸流を極めた「津軽信政」は、これを総合し、さらに自分の工夫を加えて「御当流」と称した。

- (11) 梶新右衛門正直のこと。新右衛門正直は、本多美作の家臣渡辺善兵衛勝綱の子で、梶次郎兵衛正直の養子となった。小野次郎右衛門忠常の門人として一刀流を学び拔群。徳川四代家綱、五代綱吉に仕えた。天和元年（一六八一）十二月十八日没。梶派一刀流の祖。『日本武道全集・第二巻』（既出）三五頁参照。

なお『奥富士物語・巻四』によれば、津軽信政は、梶派一刀流の流れを汲む山田伊右衛門広久を採用している。

「御神社様（津軽信政）、天和二年（一六八二）梶派一刀流劔術山田伊右門藤原広久を被召抱。天和三年三月十五日御中小姓に被仰付。



広久浪人にて武州江戸に居住にて梶正直に依り刺撃を学び精妙を得たり。今推て梶羽之一刀と曰ふ。

御当家に被召出、数年にして元禄十一卯年（一六九八或いは一六九九）三月朔日、新知百五十石被下。略」

(12) 小野次郎右衛門忠方のこと。『奥富士物語・巻四』に、津輕弘前藩の小野派一刀流道統に關し、次のように述べている。

「妙心院様（津輕信政）、小野次郎右衛門忠方に従わせられ、其の術精妙に達せらる。尤御信仰を以てと云。小野一刀と曰ふ。小野派後年極意は忠方息正御返伝遊ばさると也。是より代々小野家と御互伝に成る。故に御流儀と成て梶派共も重ねられ、同流之外表稽古と雖も他見許されざる命也。且、当君信寧公（津輕七代藩主）最も其の術御勝れ遊ばさると也。御家に従い、小野家の返り御伝之順と謂」

なお、小野次郎右衛門忠方より剣術を習うについては『津輕史・第十四卷』（青森県文化財保護協会、青森県図書館、昭

五九、三、二五）二七四—二七六頁に詳しい。

(13) 慶安事件のこと。慶安四年（一六五一）由井正雪・丸橋忠弥ら浪人の一団が江戸幕府の覆滅をはかった事件。『角川日本

史辞典』参照。

(14) 我等式。我等しき、「しき」は程度の低いことを表す接尾語。我々程度、我々風情の意。

(15) 鹿島流。香取神宮とともに鹿島神宮は武神を祭る社として武芸者の尊敬するところであり、また神官たちも往古より剣を専らとしたと云われる。この流名は『撃劍叢談』（天保十四年—一八四三—備前岡山藩士源徳修の著、『新編武術叢書（全）』

所収、二〇九頁）に紹介されているが、この系列には種々異説があるようである。殊に、本文にあるように「当田流の極意と鹿嶋流の極意と、一ツにして二ツ非ず」とすれば、こゝに云う鹿嶋流と当田流との関係づけは難しい。市立図書館蔵、

『GK-789-45当田流剣術濫觴拾書（岩見文庫）』では、日向鶴戸大権—慈音和尚—中条兵庫之助（以下略）となっていて、当田流は中条流から発したことになる。

(16) 一戸三之助宗明。津輕が生んだ屈指の武芸者。とくに浅利伊兵衛均禄より当田流剣術を、本間民部左衛門匡隆より三国神

秘弓矢（石堂竹林流）を、高田平右衛門正重より宝蔵院流槍術の奥伝を受けた。なお『青森県史』（四七九—四八四頁）に略伝が紹介されている。

## 編集後記

文化紀要の年二回発行も、今号をもちまして二年目が無事終了いたしました。御寄稿された方々、御協力下さった方々に編集員一同深く感謝いたします。来年度も研究の成果を本誌にふるって御投稿されることを期待しております。

なお、今年度は、出版費の関係で、一論文につき一定額以上の印刷費がかかる投稿者の方には、その超過分を研究費より負担していただく措置をとらせていただきましたので、ここに御了承いただければ幸いに存じます。

(大島記)

### 編集委員会

金子貞雄	新田茂	宮治昭	吉田浩	大島義晴
------	-----	-----	-----	------

### 文化紀要 第21号

昭和60年3月7日発行

編集兼発行者 弘前大学教養部

弘前市文京町一番地

印刷 小野印刷

弘前市富田町52

電話 ☎ 7471 番代